

## 脱植民地化の文学と言語戦争

西 成彦

### I

1955年にインドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議は、インドネシアのスカルノ、中華人民共和国の周恩来、インドのネルー、エジプトのナセルなどの大物をはじめとして、1957年に「ガーナ」を名乗ることになる「英領ゴールドコースト」まで含めたアジア・アフリカ29カ国の首脳クラスが集まり、東西冷戦のなかで、「反帝国主義」、「民族自決」をモットーに、第3の立場を示して、後の「第三世界」という言葉が生まれるきっかけにもなった世界史的なイベントでした。そして、そこに集まったアジア諸国は、インド以东にかぎれば、タイを除いて、いずれも第2次世界大戦で日本の軍事占領を受けた地域で、結果的に、日本の軍事占領がある種の呼び水となって「脱植民地化」を達成した国々でした。独立までにもう少し時間のかかったマレーシア・シンガポールまで含めた元・英領、その後、ベトナム戦争を経験しなければならなかったものの、1954年のディエンビエンフーの戦いでフランスの撤退を決定的にしたベトナムなどの元・フランス領、そして旧オランダ領のインドネシアや、旧アメリカ領のフィリピンなど、「アジア人の国家」を実現した諸国が名を連ねていました。そして1960年代に入ると、1955年時点では独立を達成していなかったアフリカやカリブ海地域の元・英領、元・フランス領の多くが政治的独立をたぐりよせ、その意味でもバンドン会議の歴史的意義は重大でした。今日までつづく中華人民共和国の世界政治・世界経済に対するプレゼンスの端緒を記したのも、このバンドン会議でした。戦勝国としての「中国」を代表する国家の地位を実質上中華民国から奪い取った中華人民共和国にとって、この会議の主導権を握ることは、きわめて重要なことであったでしょう。また、この会議は、かつて日本が主導した「アジアの解放」（大東亜宣言）の正当性を事後的に承認するものであったとも一部では受け止められました。「冷戦体制」を強いた米国とソ連の両大国が関与しない代わりに、戦勝国の地位を継承した中華人民共和国と、敗戦国の日本が一定のイニシアティブを担うという、きわめてイビツな構成からなる会議でした。また、それは17度線で分断がいったん確定したベトナム民主共和国とベトナム国が同時に参加するという「冷戦」状況のなかに楔を打つような会議でもあったわけです。

しかし、こうしたバンドン会議の盛り上がりを目に、かつて日本の植民地であった台湾に拠点を置いた中華民国は、中華人民共和国との対立関係が理由で出席せず、また朝鮮戦争の休戦後まもない南北朝鮮は、ソ連もしくは米国に対する依存の高さもあったので、この会議には

代表を送っていません。当時、ソ連邦の強い影響下に置かれていたモンゴルも同じです。

つまり、バンドン会議は、部分的に「冷戦状況」からの自立をもくろんだ歴史的な会議であったと同時に、東アジアに限定すれば、「冷戦状況」の過酷さを浮き彫りにしながらも、米ソに対抗する形で、「第三極」＝中華人民共和国の「台頭」、そして敗戦国日本の「再出発」を世界が承認する形の会議となりました。

こうして見てみると、1945年以降の地球規模での「脱植民地化」の動きと、米ソを軸にした「冷戦状況」とが決して世界の二分ではなく、「第三世界」という「スペース」を産み、その「スペース」に対して中華人民共和国と日本が、とくべつな位置を占めるようになっていった経緯が分かります。

## II

ところで、バンドン会議から今日の話をはじめたのには、理由があります。

私は地球規模で「脱植民地化」を考えるときに、いくつかのタイプを考えなければならないと考えています。19世紀の末から20世紀にかけて、西洋列強と日本は、まさに帝国主義的な覇権主義を展開し、しのぎを削りながら、自国の「国語」を「帝国の言語」として植民地地域へと浸透させていこうとしました。結果として、それらの地域では現地人のなかから「帝国の言語」を用いる作家たちが続々台頭するのです。なかには、英語とベンガル語をともに用いたタゴールのような詩人もあらわれましたが、少なくとも「帝国の言語」は、知的好奇心を満たすうえでも、民族運動を国際的に展開するうえでも、地域の知識人や指導者にとって避けては通れない言語になったのです。

そして、そうした諸国が第2次世界大戦の終結を契機に、独立後の体制を構築するにあたって、どのような言語政策を用いるかは、まずもって緊急の課題でした。要するに、「旧宗主国」の言語を、手放すか、手許に残しておくかという問題です。

すでに世界史的には、18世紀のアメリカ合衆国の独立や、19世紀に入ってからのラテンアメリカ諸国の独立のように、新興国が旧宗主国の言語をそのまま「国語」として継承し、さらにはヨーロッパ系有産階級のヘゲモニーを温存する形の「脱植民地化」という事例が、前例として存在しました。

ロシア革命後、非ロシア民族に形式的な「独立」を保証したソ連邦各共和国においても、「リング・フランカ」としてのロシア語の地位は温存されたままでした（モンゴルでキリル文字が使われるようになったのも同じ時期です）。

つまり、「脱植民地化」には、「帝国の言語」を温存しながら、言語を介した「旧宗主国」との連携を完全には断ち切らずに済ませるといったモデルが、ひとつの選択肢としてありえたということです。とくに両アメリカ大陸やアフリカ（アラビア語圏は少し特殊な扱いになりますが）において、「帝国の言語」のプレゼンスは、政治的にも文化的にもきわめて大きいものでした。そして、グローバル化の時代、元・英領植民地では、英語の地位がいよいよ揺るぎないものになりつ

つあるわけですが、これと並行して、英領以外、つまりフランス領やスペイン領・ポルトガル領だった地域でも、「旧宗主国の言語」と「英語」のあいだの覇権争いが、いままさに熾烈なものとなってきています。とくに、中南米・カリブ地域では、長く政情が不安定であったこともあって、米国やカナダへの亡命・移住・難民化が進み、そもそもフランス語やスペイン語を「母語」としていたはずのひとびとが、北米の英語圏に移り住んだ後にはその多くが英語を受け入れ、文学創造にも英語を用いるケースが増えてきているのです。これらの地域は、そもそもヨーロッパ人の到来以前は豊かな「言語的多様性」を示していた土地ですが、そうした「多様な言語」のなかで今日まで生き延びたものはきわめてわずかです。1930年代あたりから、ラテンアメリカでは「インディヘニスム」と呼ばれる文学運動が勃興し、ホセ・マリア・アルゲダスのように、ケチュア語のフォークロアに足場を置く作家が登場し、ノーベル賞作家、マリオ・バルガス＝リョサのようにその後継者たらんとするものもあらわれてきていますが、彼らでさえスペイン語を手放すことはなく、バルガス＝リョサなどは、米国や英国の「英語」に対する警戒心をつねに働かせている。それがラテンアメリカの現状です。

それでは、アジアはどうでしょうか？

まずひとつ顕著な現象として言えるのは、元英領地域では「帝国の言語」としての「英語」がなしくずし的に温存されたということです。インド然り、シンガポールやマレーシア然り、そして1900年以降米国の支配を受けていたフィリピン然りです。そこでは、多様な言語のなかからヒンディー語や、マレー語や、タガログ語といった「国語」が選取られ、その整備をはかりながらも、同時に「英語」は国内外で汎用性の高い公用語として残され、むしろグローバル化の時代に入ってから、それを有効に活用しようという動きが強いのです。いったん、根を下ろしかけた英語を、わざわざ「公用語」の地域から追い立てることは、もったいないことだとも言わんばかりです。

これに対して、元・オランダ領であったインドネシアや、元・フランス領だった「インドシナ」は事情が違いました。それらの地域では「旧宗主国の言語」が、情け容赦なく一掃されたのです。ベトナムのように社会主義路線を歩んだ国では、フランス語に代えて、ロシア語への接近を進めた時期がありましたし、またソ連邦の崩壊後は、そういった地域でも英語への接近が、グローバル化に参入する上での最低条件になりつつあります。

つまり、言語政策に絞ってアジアの「脱植民地化」を考えた場合、「旧宗主国の言語」の影響力の排除が、ひとつの傾向として存在し、「英語」だけが「グロービッシュ」Globishとして生き残りつつあるという現実が見えてくるでしょう。

そして、台湾や朝鮮半島などにおける日本語の地位もまた、フランス語やオランダ語と同じく、急激な低下をせまられたのでした。これは言うまでもないことです。

他方、アジアには西洋列強の進出以前から、すでに文字体系がある程度まで確立されていました。なかには植民地支配を契機に漢字からローマ字に切りかえたベトナム語、あるいはアラビア文字を使っていたのを植民地統治期にローマ字表記が広まったマレー語（インドネシア語）のような場合もありますが、タイやカンボジアやラオスやミャンマーなどは伝統的な文字を採用しつ

づけています。

というわけで、バンドン会議に集まった諸国のなかで、西洋諸語に対する依存のスタイルはまちまちでした。そして、西洋語のなかでは英語への依存が最も強く（とくにアフリカからの参加国は、エジプトやスーダン、ガーナ、リベリアなど、そもそも「英語」への依存の強い国々がほとんどでした）、逆にアジア諸国はかつての漢文化・インド文化、あるいはイスラム文化の影響下で、独自の言語と、その書記スタイルをすでに確立させていた国々が中心でした。

そして、もうひとつ忘れてならないのは、いわゆる「東南アジア」地域における「華人＝華僑」のプレゼンスです。これは社会言語学的に言えば「中国語＝マンダリン」の存在感と言い換えてもいいでしょう。つまり、「馬華文学」などというものが粘り強く生き残る土壤が、しっかりと育まれていたのです。

というわけで、バンドン会議に参加した「第三世界」の国々の「脱植民地化」と、「公用語」および「文学言語」の問題を概観してみたのですが、こうしてまわり道をしたことで、「冷戦状況」の煽りをくって「バンドン会議」に代表を送れなかった南北朝鮮や台湾（中華民国）の「脱植民地化」が持った特徴が見えやすくなるのではないのでしょうか。

### III

まず、南北朝鮮は、「旧宗主国の言語＝日本語」の排除とともに、長い歴史を持つ漢文化の影響を徹底的に排除すべく、漢字の廃止という強硬な政策を推し進めました。ハングルという独創的な表音文字の可能性にすべてを賭けたとも言えるでしょう。これは、すでに見た例では、タイやカンボジアやラオスなどのケースに近いと言えます。そして、とくに韓国語・朝鮮語以外のマイノリティ言語を話す住民が存在しないことも、南北朝鮮の「単一民族主義」を強固に支えており、むしろ南北朝鮮に少数言語の問題があるとすれば、在日や旧ソ連領に住む「高麗人」（コリョサラム）など、ディアスポラ・コリアンの言語との関係構築の方が重要でしょう。

他方、台湾では、古く文字などなかった「華麗島」Ilha Formosaに文字を持ちこんだのは、ポルトガル人であり、そしてオランダ人でした。また明・清期に断続的な漢民族の流入がつづいて、次第に「中国化」の波が及んだわけです。しかし、中国語圏で近代文学（白話文学）が成立する以前に日本の植民地統治を受けることになった台湾は、近代文学の成立にあたって、日本語で書くか、大陸でようやく立ち上がった白話文学によりどこを見出すか、台湾独自の文字体系を文学創造の力によって確立させるかという三択をせまられることになります。しかも、そうした3つのなかで、日本語以外の選択肢がほとんど失われていった時期に、島は「解放＝光復」の時を迎えたわけでした。

国共内戦にあけくれた大陸中国では、それでも近代化とともに、イデオロギー対立を越えて「国語＝普通話」の標準化だけはしっかりと進められていましたから、「解放」後の台湾でも「国語」の選択にさほど迷うことはなかったようです。しかし、いざとなってみると、「本省人」が日常的に話していた台湾諸語（河洛語や客家語や「原住民」諸語）と「国語」のあいだの乖離は、容

易に克服できるものではありませんでした。とくに、「本省人」と、北京官話を主に話す「外省人」とのあいだの齟齬や確執は、「省籍矛盾」の形で、社会から文化に至るまで、さまざまなところで、一部少数派による多数派の支配という緊張を産んだわけです。また、国民党の独裁、中国共産党の独裁、そのいずれをも受け入れようとしなかった第3の道をめざす台湾人のディアスポラ（そこには戦地や大陸から引揚げてきた「本省人」の一部も含まれました）。日本や北米、香港へと散らばった華人集団です。このことを考えるには、まさに華人を巻きこんだ複雑な「冷戦状況」を考えないわけにはいきませんが、そういう激しい人口移動の渦中で、台湾文学が新しい門出を切ったことは確かでした。

そして、まず北京官話を話す国民党系の表現者たちが台湾文学の最初のリーダーになったこと、このことは重要でしょう。それこそ、国民党の独裁が、「反国民党」的なディアスポラ（要するに日本や北米への「亡命」）を引き起こしたことと、これとを混同してはなりません。初期の台湾文学は「国民党系の亡命文学」とでも呼ぶべき特徴を引き受けたのです。

「エミグレ文学」という形態は、19世紀以降、ヨーロッパ人の政治亡命にともなう文学的な潮流として成立しましたが、同じ現象は、「冷戦状況」のなかで多数の「反共的な亡命者」を受け入れた西欧諸国・南米アメリカ諸国において継承されました。彼ら亡命者たちは現地社会への適応よりも、郷里への郷愁、そして郷里を支配するイデオロギーに対する嫌悪感を前面に押し出す形での愛国的な文学を成立させ、1950年代の台湾文学は、基本的にそういった「亡命文学」としての特徴を濃厚に漂わせていたことになるのです。しかも、台湾には「亡命文学」以外の「郷土文学」が当時はまだまだ未成熟でした。

つまり、国民党の台湾統治は、同じ漢民族で、同じ「国語」を分かち合えたかもしれない「本省人」を底辺においやる「外省人」による一種の「植民地統治」に近かったのです。それこそ、英国を追われてきたアングロ＝サクソンが最終的に米国を独立させ、またその例に倣って、現地生れの「クリオーリョ」criolloたちが、先住民にはなんら解放ももたらすことのない独立を成し遂げたように、「旧宗主国」の言語や文化に対する忠誠こそ失わないものの、まさにその「旧宗主国」との距離をこそ、ナショナル・アイデンティティの基礎に置こうとした「遠隔地ナショナリズム」が台湾文学の基調になったのでした。そして、台湾海峡を挟んだ国共対立が終息の気配も見せないまま、台湾文学は1960年代あたりからようやく「本省人」をも巻きこみながら「郷土文学」へと少しずつ裾野を広げ、1987年になってようやく、国民党の一方独裁からの解放という新しい時代に突入したというわけです。北京官話を唯一の「国語」とした一方独裁の終わりは、「多言語の島」としての台湾イメージの浮上（前景化）を意味しました。

いまや台湾文学は、南北アメリカの文学が、英国やスペインやポルトガル本国の文学と一線を画するように、大陸の文学とは確実に一線を画しているでしょう。そして、「外省人」の文学においてすら、「亡命」後の経験を中心に文学的な素材が拾われることになり、「郷愁の文学」というより「本土化の文学」の要素を強めているでしょう。しかも、その「本土化」の流れのなかで、「原住民」を含む「本省人」のプレゼンスが強まりつつある。それは、あたかも、1945年以降、「脱植民地化」を一直線に推し進め、そして何より「旧宗主国語の言語」との絶縁に成功した東南ア

ジア諸国の事例に似た歴史的な足跡を台湾文学はたどったかに見えるわけです。

しかし、一時的にでも、台湾文学が「亡命文学」としての特徴を前面に押し出したものであったことを忘れるべきではないでしょう。島の多言語状況とは別に、「普通話」という「リング・フランカ」を通じて、大陸はもとより、世界の華僑とつながりうる文学の国際的なネットワークが「台湾文学」の未来にもつながっているからです。

そして、同時に、台湾文学の「本土化」が進むなかで、そもそも北京官話とは異なる河洛語や客家語を「母語」として生れ育った「本省人」の台湾文学への参入は、世界規模で見ると、もうひとつのタイプの「脱植民地化」の事例との共通性を強く持っているのです。

それが「クレオール」です。

#### IV

言語学でいう「クレオール言語」とは、コロンブス以降の西洋植民地主義の歴史の副産物として、ヨーロッパ諸語を「母語」とはしないひとびとが、カタコトの西洋語を話し、そうした「ピジン言語」が、しだいに「母語」に等しい地位を得て世代間に継承され、いつしか「宗主国の言語」とのダイグロシア関係を生きるようになったものです。現在でも、とくにカリブ海地域では広範囲で用いられており、元・英領のジャマイカやトリニダードでは一般に「パトワ」と呼ばれ、ハイチやフランス領のマルチニークなどでは「クレオール」、オランダ領のアンチル諸島では「パピアメント」というふうに、それぞれの名前で呼ばれるのですが、こうしたクレオール言語の存在感は、現地出身の作家たちにさまざまな実験を強いてきました。英語圏の現代作家には、「パトワ」の荒々しい響きを前面に押し出すことで、英語圏文学のなかで最も戦闘的な一群の作家たちが生れてきています。またフランス語圏では「クレオール」の独特な言語的遺産をフランス語に置き換えることで、フランス語そのものの「歪曲」と「酷使」を推し進めています。「クレオール性」という「国民国家」の原理を越えた世界観を打ち出していることも、フランス語圏作家の特徴です。また、オランダ語はもとより、スペイン語やポルトガル語や英語の要素まで大いに含みこんだ「パピアメント」の使用地域では、宗主国の言語を用いたオランダ語文学を凌ぐ勢いで「パピアメント」の正書法に基づいた創作がこのところ盛んになってきています。こうしたカリブ海地域の現実は、1945年以降の台湾で生まれえたかもしれない、またこれからだっていつ生まれないともかぎらないさまざまな言語実験の可能性を示唆しています。

じっさい、日本統治期、そして国民党の一党独裁期には、困難であったことの多くが今なら可能かもしれないとも思います。安定性を志向する「国語」と比べて、庶民の言語としてのクレオール言語は、変幻自在で、創意に富み、あらゆるものを「カニバル＝食人的」に呑みこんでしまう生命力を備えています。要するに、台湾文学は、「国語」の下位に置かれている台湾諸語の用い方次第では「本土化」の傾向をさらに強められる可能性を秘めているのです。しかも「リング・フランカ」としての北京官話を手放さないかぎり、世界の華人とのネットワークは維持できるでしょう。

## V

考えてみれば、日本もまたそうであるように、どのような「国語」にも、下位言語としての「方言」は存在します。北海道開拓や琉球処分、台湾やサハリンや朝鮮半島の領有以降、日本語文学は、現地人作家の参入をも経ることで、躍動感のある文学史を産み出してきました。日本語を「母語」とはしないリービ英雄や楊逸の登場を可能にしたのも、明治以降に培われた日本語文学の弾力性がしっかり物をいっているのだと、ぼくは思っています。

たとえば、日本語の印刷物には「ルビ」なるものが存在します。佐藤春夫や中西伊之助、あるいはバチェラー八重子や大城立裕の文学の成立を考えるときに「ルビ」の効用を軽視するわけにはいきません。植民地支配の拡大に伴う日本史のなかで、文学は一見「一言語」で書かれているように見えても、そこにはさまざまな異言語の響きが鳴り響いていました。植民地地域の多言語状況がある程度まで「写し取る」ことは、「ローカル・カラー」を前面に出すうえで効果的な方法でした。そして、敗戦後、植民地を失った後も、在日外国人のさまざまな作家たちが、それぞれのディアスポラ体験、移住体験を踏まえながら、日本語文学の多声化を試みようとしています。

おそらく、日本語圏以上に、長く広範囲でのディアスポラや亡命や移住を重ねてきた華人の記憶は、台湾を足場に置く形で、中国語文学の多声化を促すでしょう。それは大陸中国で生じるかもしれない多言語状況を踏まえた文学に対して、いつでも張りあえる、もうひとつの実験を可能にするはずです。そして、そのとき、カリブ海地域で起きているように、下位言語を荒削りなまま文学のなかに取り込む手法、あるいは下位言語に正書法を与えて、その文学的成熟を待つという手法、そういった方法も多様に追求されていくことでしょう。

じつは、旧植民地地域が「脱植民地化」のプロセスをたどるなかで、「国語」による異言語の完全な制圧が実現されている地域は思いのほか少ないのです。「バンドン会議」参加国のほとんどは、いまなお少数民族や少数言語をかかえています。またそうでない国々（例えば韓国）においても、北米に拠点をおくコリアンを含めたディアスポラ・コリアンとの交通なしには、国民文学自体が成立しない時代を迎えようとしているのです。

## VI

最後に、ひとつのエピソードをお話ししておきましょう。

2009年7月、植民地文化学会の年次大会に台湾の李喬さんが講演者としてお越しくださいました。講演のなかで少しだけ日本語を話されたのですが、子どものころに日本語を身につけられたその日本語は、ただどどしくはあっても、堂々たるものでしたが、そのお話のなかで感じ入ったのは、彼はフォークナーをこよなく愛しておられ、中国語であれ、日本語であれ、翻訳があれば、なんにでも飛びついたらおっしゃっていたことでした。そのとき、わたしはまず多和田葉子さんの『エクソフォニー』に出てくるひとつのエピソードを思い起こしました。

ゲーテ・インスティテュートの招きでドイツからソウルを訪れた彼女は、パネル・ディスカッ

ションの場で、韓国人を代表する作家のひとりであるベテランの朴婉緒（パク・ワンソ）さんに対して会場から向けられた「影響を受けた作家は誰ですか？」という質問をめぐるやりとりで、度肝を抜かれるのです。その質問に「何人かヨーロッパの作家の名前を挙げ」て済ませようとした朴婉緒に対して、質問者は「日本の文学は全然読まなかったんですか？」とたたみかけました。そして、この再質問への応答が、多和田を愕然とさせたのです。

日本文学が外国文学だという発想はわたしたちの世代にはない、わたしたちの若い頃は日本語を読むことを強制され、韓国語は読ませてもらえなかったのだし、だからドストエフスキーなどヨーロッパの文学も全部、日本語で読んだのだ、と答えた。

朴婉緒は、1931年の生れで、8歳のときにソウルに出て、ほぼ6年間、日本の植民地教育を受けていました。彼女はソウルで日本語を通して「外国文学」に親しんだ世代なのです。

そして、この応答をふり返りながら、多和田はこう続けます。

母語の外に出る楽しみをいつも語っているわたしだが、日本人のせいでエクソフォニーを強いられた歴史を持つ国に行くと、エクソフォニーという言葉に急に暗い影がさす。母語の外に出ることを強いられた責任がはっきりされないうちは、エクソフォニーの喜びを説くことも不可能であるに違いない。

多和田葉子のように多才で、複数言語を文学としてあやつる才人にしてからが、「母語」、「母国語」の唯一性という信仰から自由ではなかった。このことは日本の「国語ナショナリズム」の大きさを物語っていますが、であればこそ、この驚きはすべての日本人が共有すべきものでしょう。少なくとも植民地支配を経験した地域の方々は、基本的に複数言語使用を要請され、「母語」さえもが、1つではありえない状況を生きてこられた。そして、その多重な言語能力は、時として「外国文学」を読むときに、とても都合の良いツールにもなった。そういう場合には、「日本文学」でさえもが、日本統治経験者にとっては「外国文学」ではないのです。それは「バンドン会議」に参加したほとんどの国々のひとつと、とくに知識人が経験していたことでした。インド人やガーナ人にとってシェークスピアは「外国文学」だったか？ ベトナム人にとってラシーヌは「外国文学」だったか？ 多和田葉子でさえもが、そういった問いをソウルに行くまでは自分に向けることがなかったのですが、この問いは、「ポストコロニアル文学」の本質についています。

おそらく、歴史を経て、いまの若い台湾人や韓国人にとって、日本語文学は、それこそ在日朝鮮人が書いた物でさえ「外国文学」にすぎないかもしれません。しかし、「脱植民地化」というプロセスは、そういう長い時間を経て初めて達成されたのです。そして、そうこうするうちに、グローバル化の嵐のなかで、世界中のひとつひとつが英語文学を「外国文学」とは呼べなくなっていく、そんな勢いです。「世界文学」なる言葉が台頭してきた背後には、そうした「英語帝国主義」の影が大きく落ちています。

李喬さんの話を聞いて思ったことのひとつがこれでした。台湾の文学は、マレーシアをはじめとする東南アジアや北米の同胞との関係を見捨てては成立しないでしょう。そこでは、北京官話(普通話)が「リンガ・フランカ」であると同時に、英語に期待される役割も大きくなってきそうな気がします。かつて植民地宗主国の「国語」が果たしていた「リンガ・フランカ」としての役割を、英語が果たすようになってきているというのが、21世紀の地球を動かしつつある趨勢なのです。

そして、もう1つ李喬さんの話を聞きながら、なるほどと頷かずにおれなかったのは、彼がフォークナーをこよなく愛しておられるということでした。フォークナーは米国南部ミシシッピ州の出身で、まさに南部の歴史に根ざした物語を英語で書き続けた作家でした。しかし、ミシシッピ河流域は、河口の港町、ニューオーリンズを中心として、そもそもフランス領ルイジアナとして君臨した土地です。ところがナポレオンによるルイジアナのアメリカへの売却、そして南北戦争で頂点に達する奴隷制経済の崩壊とともに、南部はしだいに北部のアングロ＝サクソン文化への同化をせまられたのでした。

同じく南部作家のひとりにテネシー・ウィリアムズがありますが、有名な『欲望という名の電車』*A Streetcar Named Desire*の女主人公は、映画や芝居では「ブランチ」の名で呼ばれていますが、そもそもは、フランス系農場主の家に生れ、ブランシュ・デュ・ボワ(Blanche Du Bois)が本当の名前でした。しかし、奴隷制の廃止とともに没落した家の出である彼女は、プライドだけは失わないまま、しかし背に腹は代えがたく、英語教師をしながら糊口をしのいでいたのを、とうとう家屋敷を借金のかたに取られ、妹がポーランド系アメリカ人と暮らしているニューオーリンズに亡霊のようにさまよい出てくるという話です。ともかく、政治的・経済的な覇権が歴史とともに移り変わっていくなかで、歴史にもてあそばれるように生きてきたひとびとの波乱万丈の歴史が、「弱者」の物語として書かれるのが、アメリカ南部文学の特徴でした。フランス統治時代の記憶や奴隷制時代の記憶からなかなか逃れられずにいる伝統的な南部社会の停滞感、しかし、世の中が急速に移り変わろうとしているからこそ哀愁を誘う停滞感という主題は、まさに李喬さんの文学の主題だと言えるでしょうし、日本にもフォークナーに深く傾倒した作家としては大江健三郎や中上健次や津島佑子の名が挙げられますが、そうした作家たちの作品にも通じる要素が、台湾ではその歴史と分かちがたい形で沁みこんでいるのかもしれないと、その話を聞きながら思ったのでした。

また、李喬さんよりもさらに若い世代のあいだでは、ガルシア＝マルケスらの「魔術的リアリズム」の影響も大きいと言われます。米国と共犯関係にあったさまざまな軍事政権の台頭を促した20世紀ラテンアメリカの政治風土のなかから生まれた「魔術的リアリズム」は、さまざまな植民地主義の負の遺産に縛られ、しかも過酷な軍事政権の抑圧を受けるなかから生まれました。そういった文学に親近感を覚えた台湾作家が少なくなかったということは、台湾の歩んだ歴史を考えれば、偶然とは思えません。

## VII

植民地化であれ、近代化であれ、グローバル化であれ、それらは、目まぐるしい世界の変化と、その変化の最先端と比較した場合の伝統的社会の停滞感とを、二重に強めるものです。そして、歴史に翻弄されてきた土地であればあっただけ、そういった躍動と停滞のコントラストは鮮明にあらわれてくるでしょう。

そして、そうしたコントラストを示すマーカーのひとつが言語であり、多言語的な空間にあっては、世界を蔽う躍動を満喫しようというときに使い勝手のいい言語（国際語や公用語）と、停滞感や伝統への依存を味わい尽くそうというときによりどころになる言語（土着語）に役割が二極化するのです。李喬さんという作家は、はっきり「台湾独立派」に属することを主張されている作家ですが、それでも彼は「文学言語」としての北京官話を手放そうとはされません。その落差をむしろ文学の力に変えようとしておられるのだと思います。

ここで最初の話に戻りますが、大航海時代以来、バンドン会議の時代までつづいた植民地主義・帝国主義の時代を経て、世界の多くの地域では、まさに気分しだいで言葉を使い分けながら、言語間の「落差」を生きるライフスタイルがいまもなお維持されつづけています。日本では沖縄県においてすら、そういった多言語状況は、せいぜい標準語と方言の使い分けレベルにまで縮小されてきていますが、たとえば目取真俊や崎山多美のような作家は、そういった歴史を逆向きに回転させるような暴力性をもって、続々と日本の文壇に登場するいかなる外国人作家よりもラジカルな形で日本語文学の一元化に逆らおうとしています。

はたして、これからの台湾文学はどこに向かうのでしょうか？ そして、じつは台湾以上に多くの少数民族をかかえている大陸中国の文学は、どのような方向に進むのでしょうか？

東アジアの「冷戦状況」がどのように乗り越えられていくのか、その歩むべき道はだれにも予測不能ですが、いまや「冷戦状況」がつづくなかでさえ、文化やひとの流れは日々活発になっています。ましてや「冷戦状況」が崩壊、もしくは解消された日には、それはさらに激化するはずです。これから起こるかもしれない地域ごとの多言語化（国際化）と、かつて植民地を彩った多言語状況とが、そうしたなかでも一本の「文学史」としてつながっていくような気がするのです。言語戦争は、これからもなお形を変えながら続いて行きそうな気がします。